

コリント人への手紙第一8章1節 「知識と愛」

1A 偶像についての知識

1B 偶像の宮における肉

2B エルサレム会議

3B 主ご自身の警告

2A 知識による見下し

1B 派閥

2B 罪の容認

3B 絶え間ない争い

3A 愛による育て上げ

1B 弱さの助け

2B 権利の引き下げ

本文

コリント人への手紙第一 8 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが 7 章まで来ました
が、今日は 8 章を見ていきます。午後に一節ずつ見ていきますが、今朝は、1-3 節に注目します。
「¹ 次に、偶像に献げた肉についてですが、「私たちはみな知識を持っている」ということは分かっ
ています。しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。² 自分は何かを知っていると思う人
がいたら、その人は、知るべきほどのことをまだ知らないのです。³ しかし、だれかが神を愛するな
ら、その人は神に知られています。」

コリントの教会にあった、また新たなる問題です。偶像礼拝が教会の人々の一部で行われてい
ました。派閥があり、性的な不品行があり、そして偶像礼拝です。本当に困ったもんだと思います
が、いやいや、今のキリスト教会に、しばしば起こっている問題ばかりで、とても身近な問題です。

日本の中で、みなさんは、神社仏閣に取り囲まれて、異教に接しながら生きてきましたね。クリ
スチャンの家庭で育っていなければ、信仰を持つにあたって、心の中で何らかの葛藤を覚えて生
きてこられたと思います。私の場合、信仰を持ってから、日本が嫌いになってきました。周りが偶
像だらけだと思ったからです。そして、偶像のない、キリスト教の影響の強いアメリカがうらやまし
くなりました。けれども、だんだん変わってきました。聖地旅行に行きました。エジプトに行って分か
りましたが、古代エジプトがどれほど偶像と一体だったのかを知りました。太陽神ラーを始め、何
でもかんでも神々だったのです。そして、ギリシアとローマの世界、つまり西欧文明の始まりですが、
こっちも偶像だらけであることを知りました。使徒の働きで、アテネにいてパウロが熱くそもそも、
イスラエルの神以外はみな偶像を拝んでいたのです。

つまり、日本は特別に偶像が多い国というわけではないことが分かってきたのです。そして、自分が日本人として日本で生まれたのは、神の召しであることが分かるようになり、神が日本を愛しておられることが分かってきました。聖書も、アメリカの人たちよりも、むしろ私たちのほうが、そのまま書かれていることを当てはめることができることを知り、今に至っています。コリント人への第一の手紙も、その多くが、そのまま私たちの文化や社会にも当てはまるものばかりで、神さまが用意してくださったのだなと思います。

1A 偶像についての知識

一節を見てください。「次に、偶像に献げた肉についてですが、「私たちはみな知識を持っている」ということは分かっています。」

1B 偶像の宮における肉

「偶像に献げた肉」ということですが、偶像の宮において、その場で食べて、偶像礼拝の中で肉を食することが一体になっていました。私たちは、どうでしょうか？ 仏壇の供え物はその後、食べるのでしょうか？ ネットで調べたら、仏壇の中心にいるお仏様へのお供えらしいです。そして、お寺のお坊さんの説明によれば、お供え物は、「お下がり」としていただくのだそうです。ですから、少しだけ、この状況に当てはまるでしょう。

また、私たちに大きいのは仏式の葬儀です。すべてが、そこにいる死者の霊を弔うことが葬儀の中心であり、キリスト者としては悩ましいものです。なぜなら、キリスト者は、死んだ方を敬い、丁寧に葬ることは聖書に書かれていることであって、それはすべきことですが、それが日本では偶像礼拝に直結しているという葛藤があります。ご遺族を慰めるために私は参加しますが、死者の霊を弔う直接的な行為は、避けるようにしています。

けれども、コリントの教会には、そういったことは避けることなく、偶像に献げた肉については自由に食べている人々がいました。性的不品行についてもそうでしたが、「すべてのことは許される」という信条で、自分たちには権利があると思っていました。彼らにはしっかりとした知識があり、その知識自体は正しかったのです。パウロ自身がそのことを説明しています。「8:4 さて、偶像に献げた肉を食べることについてですが、「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」ことを私たちは知っています。」そうです、神々と呼ばれていても、そういったものは存在していません。唯一の神、そして唯一の主イエス・キリストがおられるだけで、神々はいなのです。ですから、木や石にしか過ぎないものに肉を献げているだけですから、その肉が汚れたものになっているわけではないとして、市場の肉はもちろんのこと、偶像の宮でも肉を食べていました。それで彼らは、「私たちはみな知識を持っている」とパウロに書いて来ていたのです。

2B エルサレム会議

しかし、そのことについてパウロは、愛による行為ではないとしています。「しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。」と言っています。これは、エルサレムにおける使徒たちや指導者たちの集まっている会議で、明らかにされました。エルサレムから来た者たちが、パウロとバルナバに対して、アンティオキアにて、異邦人もモーセの慣習にしたがって割礼を受けないと救われな
いと言ったので、エルサレムで決着をつけるべく、エルサレムに行きました。そこで、パウロが異邦人の中での神の働きを証しすると、やはり、パリサイ派で信者になった者が、同じことを言いました。それで激しい論争になりましたが、ペテロが、異邦人も、神の恵みによって信仰によって救われるのだと言いました。ヤコブも同じ意見を言います。

そこでこう言います。「使 15:19-21 ですから、私の判断では、異邦人の間で神に立ち返る者たちを悩ませてはいけません。20 ただ、偶像に供えて汚れたものと、淫らな行いと、絞め殺したものと、血とを避けるように、彼らに書き送るべきです。21 モーセの律法は、昔から町ごとに宣べ伝える者たちがいて、安息日ごとに諸会堂で読まれているからです。」モーセの律法を守るように言って、異邦人の人たちを悩ませてはいけな
いとしつつも、「偶像に供えて汚れたもの」を避けるように書き送るべきだと言っています。それは、偶像礼拝を避けているユダヤ人の人たちのつまずきにならないように、ということです。そして、パウロは次の宣教旅行で、尋ねる諸教会に、この手紙の内容を伝えて行ったのでした。

一方では、自由を得たのだとしながら、どうして避けるようにと言っているのか？それは、愛の配慮です。偶像に供えられた肉を食べるのをユダヤ人が見たら、それだけで福音から遠ざかってしま
うだろうし、また、信じたユダヤ人は悲しみと怒り、また異邦人の信者から離反するなど、大きな隔たりが生じるだろうということです。例えば、もしアメリカのクリスチャンが、人の家にはいる時に土足で入ったらどうでしょうか？靴を脱ぎなさいという命令は聖書には書かれていない。単なる習慣なのだから、と言ってきたらどうでしょうか？日本人の人は、そのことでもはや、その人たちから福音を聞こうとは思わないでしょう。イエス・キリストの福音を聞いて、それです
ますのであれば、それは残念ですが仕方がないことです。けれども、自分の自由だと拘って、イエス・キリストのところに来るのを自分のしていることで妨げるのであれば、これは大きな罪なのです。

信仰といっても、それは知識に基づくだけでなく、愛に基づきます。「ガラ 5:6 キリスト・イエスにあ
って大事なものは、割礼を受ける受けないではなく、愛によって働く信仰なのです。」

3B 主ご自身の警告

そして、偶像に献げた肉を食べるということを、イエスご自身が罪として警告している言葉があります。どちらも、黙示録にある七つの教会の一部です。ペルガモンにある教会に対して、言われました。「2:14 けれども、あなたには少しばかり責めるべきことがある。あなたのところに、バラムの

教えを頑なに守る者たちがいる。バラムはバラクに教えて、偶像に献げたいけにえをイスラエルの子らが食べ、淫らなことを行うように、彼らの前につまづきを置かせた。」偶像礼拝の中心的な部分に、いけにえを食べることがあります。イスラエルの神、まことの神に対しても、聖書では、交わりのためのいけにえがあり、一部は祭壇で火で焼き、残りを民が食べるということで、神と交わるようになっています。食べることによって、一つになっているのです。私たちも、主ご自身の肉と血にあずかるということで、パンとぶどう酒を受け取りますね。ですから、異なる神に対してこのような行為をするのは、まさに霊的に姦淫をしているようなものです。そして、実際、このような儀式と共に、淫らな行いが付き物でした。同じように、ティアティラにある教会に対しても、イエス様は警告されました。「2:20 けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは、あの女、イゼベルをなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせている。」

ですから、コリントの教会の人々が偶像の宮で肉を食べているというのは、本人たちは大丈夫だと思っているのですが、その自由が人々をつまづかせます。そして、自分たち自身も偶像礼拝に関わる非常に危険な遊びをしていると言っているでしょう。このことについては、10章でパウロが、悪霊と交わっていると言っています。その時に、詳しく学んでいきたいと思えます。

2A 知識による見下し

神への愛、人への愛のないところにある知識は、人を高ぶらせます。

1B 派閥

パウロは、ここで「**知識は人を高ぶらせ**」ていると言っていますね。コリントにある教会の問題が、知識による思い上がりであったことを思い出してください。初めに、仲間割れ、派閥の問題がありました。「4:6 それは、私たち(パウロとアポロ)の例から、「書かれてあることを越えない」ことをあなたがたが学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して思い上がることをしないようにするためです。」そして彼らは、キリストにあって賢くなっていると思っていました。知識によって思い上がっていたので、高ぶりがありました。

2B 罪の容認

そして自分たちは、いろいろ、多様性をもっているのだとして、近親相姦の罪を犯している者をそのまま教会の中に容認していました。これも、思い上がりだとパウロは叱責しています(5:2)。

3B 絶え間ない争い

そして、コリントの教会ではないですが、教会で知識と呼ばれているものを持っていると誇ると、その者が争いを引き起こすことが、エペソにあった教会で分かっています。テモテがエペソの教会を任されていたが、違った教えを説いて、絶え間ない議論と争いをしている問題に取り組んで

いました。「I テモ 6:3-4 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと、敬虔にかなう教えに同意しない者がいるなら、4 その人は高慢になっていて、何一つ理解しておらず、議論やことばの争いをする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、ののしり、邪推、絶え間ない言い争いが生じます。」

そもそも、思い出してください、知識を得たいと思って、人は神から離れたのです。そう、善悪の知識の木から、実を取って食べたのは、自分たちが神のようにになりたいからでした。高ぶりによって、神に罪を犯し、神から離れてしまったのです。

3A 愛による育て上げ

しかし、「愛は人を育てます。」とパウロは言っています。知識が間違っているわけではありません。愛のうちに生きる時に、知識が自分自身を求めるのではなく、人々を助け、その人がイエス・キリストの真理にあって育っていくように導くことができます。

1B 弱さの助け

コロサイ書には、キリストのうちに、「知恵と知識の宝がすべて隠されています。」とあります(2:3)。全ての知恵と知識がキリストのうちにありますが、この方はその知識をご自分のために用いないで、私たちと同じ肉体の弱さをもって現れてくださいました。私たちの肉の弱さに寄り添って下さり、そして、私たちをそこから助けてくださったのです。ペテロのことを思います。彼が三度も、ご自身を知らないということを知って、それで前もって執り成しをしてくださり、彼が事実、三度否んでも、彼の顔を少し見て下さり、そして死んでよみがえられたら、ペテロに、「わたしを愛しますか？」と三度尋ねられました。それで、彼は立ち上がることができ、後に兄弟たちを励ますことができるようになりました。イエス様は、ご自身の知識を愛による建て上げのために用いられました。

私たちがこのキリストのうちにいるのですから、自分を喜ばすためではなく、人の弱さを担うべきです。「ロマ 15:1 私たち力のある者たちは、力のない人たちの弱さを担うべきであり、自分を喜ばせるべきではありません。」そこでパウロは、偶像に献げた肉を食べたら、良心が汚される人々もいるのだと言っています。「8:7 しかし、すべての人にこの知識があるわけではありません。ある人たちは、今まで偶像になじんできたため、偶像に献げられた肉として食べて、その弱い良心が汚されてしまいます。」

私がバプテスマを受けた教会は、実家の町にあります。そこに神学生がいました。将来、牧師になる卵ですね。彼は、いろいろなことに自由なアプローチを取っていました。聖書の天地創造の記述も、そのまま受け取っていませんでした。私がおまかせ止めていることを告げると、気分を害しているようでした。数年後に、学校休みで戻りますと、彼が若い人々を集めて動いています。そして、一緒にカラオケ店に行きました。そこにはビールの缶が出てきました。まあ、ここまではい

いかかもしれません。次に行ったのが、キャバレー店です。いやらしいようなことは、ありませんでした。けれども、一人の兄弟が酔いしれて、もう立てる状態ではありませんでした。そして後日聞きましたが、彼はもう教会に来なくなっていました。信仰からも離れたかかもしれません。

これが、まさに「その弱い良心が汚されてしまいます。」ということです。本人は、その自由な行動で、キリスト者としての自由を謳歌していると思っているかもしれません。けれども、生活で悩み、信仰のことで悩んでいる兄弟がいて、彼を酔いつぶれるような環境に置き、結果、教会へも来なくなり、信仰もどうなったのか分からない状態にさせたわけです。

2B 権利の引き下げ

パウロは、このような自由な行動を「権利」とも呼んでいます。「8:9 **ただ、あなたがたの権利が、弱い人たちのつまずきとならないように気をつけなさい。**」パウロは、8章だけでなく9章でも、人に与えられている権利を話しています。彼は使徒であり、福音宣教者ですから、人々から物質的な支援を受ける権利があることを話しています。しかし、彼らにお金をむしり取っているという疑いがかけられないように、自分の奉仕が純粋な動機から来ていることを模範として示すために、一切、報酬を受け取らずに、自分で働いたことを述べています。当然のように持っている権利でも、主を愛し、人々を愛している時に、それは横におき、その人たちが建て上げられることだけを考えるようになるのです。

ある人が信仰の歩み、その成長について、こんなことを言ったのを覚えています。「初めは、自分のことで精一杯だ。次に、神のことを思うようになる。それから、人に関心が向かう。」ということです。人間の世界の幼子もそうですが、まずは自分自身が成長して、教育を受けて、しっかりとしないといけませんね。自分のことだけで精一杯です。そして、自分の興味があるものを人に話していく。信仰においても、自分が中心の世界なわけです。けれども、次第に、神が何をしておられるのかを知りたいと願います。神のご計画について知りたい。神のなされていることを見ていきたい。ちょうど、人間の成長に喩えれば、いろんなものに興味があって前向きな青年ですね。けれども、次に、主にあって、人々のしもべになろうと努めます。この方が心に留めていることに自分も心に留めるようになります。この方が愛しておられる人々に、自分も関心が向きます。人が成熟し、大人になり、子供を持ち、年を取れば、自分のことはさておき、人々を手塩にかけて育てたいと願います。その人たちを育て上げることが目下の関心事であり、自分の権利のことには目が行かなくなります。

したがって、もう大人のようにになっている年数が経っているのに、相変わらず、自由を謳歌したいというようにふるまうと、どうなるのでしょうか？育てられなければいけない人たちが自分のそばにいるのに、かえって、その信仰の歩みをつまずかせることになるのです。

子供をネグレクト、育児放棄する若いお母さんについてのニュースを見る時に、ふと、いつも思うのです。同じぐらいの独身の女性であれば、だれもが楽しみたいものがあります。今、クリスチャンというよりも、喩えとして人間的に話しています。飲み屋に行くことは誰もがやっていることでしょう。自由だし、そうした幸福を追求する権利があるのです。けれども、子供が与えられたということによって、母親になりました。子供は 24 時間、母親からの注意を必要とする存在です。母親は逆に 24 時間、子供への注意を注ぐことを求められる存在です。しかし、母親はそのことを、自ら喜んで行います。自ら、自分の権利を捨てるのです。

母の日になると、しばしば SNS で出てくる動画があります。それは、仕事の面接の場面です。一人ひとり、それは作られた面接だと走らないで受けています。仕事の内容を聞いています。ずっと立っていて、ずっとかみがんだりして、7 日間、24 時間ずっと、休みがありません。休憩時間はないと会社側は言います。昼食は、同僚が、すべて食事が終わったら、食べると説明を受けます。そして、人とのコミュニケーション能力にすぐれ、薬の知識や会計もできなければいけません。そして同僚と徹夜の仕事もあります。祝日のお休みなど、全くありません。むしろ、仕事の量は増えます。睡眠の時間さえありません。そして最後の給料ですが、全くありません！こんな仕事の内容の説明を受けて、「非人道的だ！」と叫んだりしていますが、「お母さんのことですよ」と答えると、みんな感動し、涙を流していました。これが愛の力ですね。¹

ですから、私たちは、キリスト者になったというのは、この愛のマジックを学んでいるのです。そう、マジックです、魔法です。自分を喜んでかなぐり捨てる力を学んでいます。これがいわゆる「知識」じゃないことが、分かりますね？知識は必要です、けれども、知識だけを求める人は、必ず人をつまずかせます。いや、自分自身をつまずかせます。キリストにある知識は、自分というものを捨てるようにされるからです。自分というものを持っていたら、それは邪魔になるからです。

¹ <https://youtu.be/7CLvpdSufR0>